

新型コロナウイルスと日本語教育 ③

教育のデジタル化

新型コロナウイルス禍は神が与えた試練でもあり、各人が自らのあり方をいろいろと見直す機会を与えたものと、筆者は受け取っている。とくに教育に携わる者として言えば、学習者の中で「学び」が起こっているかどうか、教える側も習う側も振り返る機会を与えられているように感じている。教育工学、教育心理学の野嶋栄一郎は教育のデジタル化は学校組織に変化をもたらすとして、次のように述べている。

教育のデジタル化が情報伝達の時間、空間的枠組みを超えるものならば、教授者と学習者が同じ時間に、同じ場所にいる必要はなくなる。これらのメディアを前提とすれば両者が同じ時間に同じ空間にいることを前提とする必然性はまったくなくなる。このような事態では教室、時間割の考え方を改めざるを得なくなる。むしろ逆に、対面で、同じ場所、同じ時間に席を占める教育に求めるものは何か、再考を余儀なくされるであろう。メディアはさまざまなシステムをリストラクチャーする。⁽¹⁾

大学では年間のカリキュラムに沿って、その授業を担当する教員が教室へ行き、登録した学生が教室へ来て、日々の授業が行われることが、平時では何の疑問もなく行われてきたように思う。それは当たり前前で、深く考えたり、意識したりすることではなかったのかもしれない。しかし、この新型コロナウイルス禍では図らずも意識せざるを得ない状況になったと言える。言い換えれば普段当たり前に行ってきた授業がそれでよかったのか、このコロナ禍という状況の中で「学び」というものを本質的に考えなければならなくなったとも言えるのではないだろうか。

受動的な学習

学生の中には出席だけして、試験前に少し勉強して何とか卒業に必要な単位がもらえればいいと考える学生が少なからずいると思う。筆者も学生時代を振り返って、決して学習意欲に満ち、すべての授業に積極的に参加していたとは言えないのだが、教室の中で深く考え、新しい知識を身につけるためには、積極的に授業に参加しなければもったいない話である。以前、この連載の17回目で日本語教員養成課程の「日本語教育入門」の授業を担当した時の話を書いたが、登録した56人の学生を相手に大教室でどのように授業を展開するべきかいろいろと考えた。もともと、資格を取得する課程でこの授業を取らなければならないから履修登録した、あるいは興味本位で登録してみたなど、学習動機の面ではいろいろあるようだ。実際の授業では私語も多く、積極的に参加しているとは感じられない学生もいた。「受け身」で参加している学生であったとしても、授業を受けるうちに興味を持ち、「主体的に」授業に参加できるように仕向けることも教師の役割ではないのだろうか。その教科を研究する面白さ、奥深さなどを知り、さらに主体的にもっと知りたくなるように興味を喚起させるような授業ができれば、教員も学生も有意義な時間を共有できるのではないだろうか。

能動的な学習

以前、定期的に奈良教育大学社会科教育の田渕五十生教授^{いそお}主催の勉強会に参加していた頃、現役の小学校教員であり、院生でもある先生方の発表に驚いたことがある。その先生方の相手

は子供であり、興味を引き出すようにうまく自作の小道具やパソコンやプロジェクタを使い、受動的になりがちな学習を能動的な学習になるように創意工夫を重ね、子供たちに深い「学び」が起こるように工夫されていた。それはまるで職人技のようでもあった。この勉強会は平日の夜7時に集まり、日が変わる時までであったこともあるが、筆者にとって疲れも感じず、心地よい疲労と共に次への活力になっていた。これが「学び」なのかも感じていた。ただ知識を積み重ねるのではなく、自分の仕事に直結した「生きた知識」として学べたことが大きかった。自分が経験した「学び」というものを普段の授業の中でも学習者に与えることができたなら、教える側も学ぶ側も幸せな時間を共有することになるのではないか。

「学ぶ」ということは

一般的に、学校では教師が教育の専門家として学生に対して指導に当たる。教師は効果的に知識を身につけさせるように知識を伝達し、その知識が獲得されたかテストを行い、評価する。当たり前に行われてきたことだが、学生の興味や関心とは関係なく教育の内容が定められ、学生が主体的に興味や関心のあることを選択しているわけではない。言い換えれば学校で「学ぶ」ということは受動的な作業であり、基礎的知識や技能を習得することが目的であり、将来的に出会うであろう問題に対して、対処できるための能力を養うことが目的とされている。しかし、これらの過程は学習する意味を捉えにくく、学習動機の面で弱く、受動的になりがちである。そしてテストを受けて評価されるのであるから、良い成績を取ることが目的化され、テストのための勉強となってしまう傾向がある。効率の良い積み上げ式のカリキュラムで工夫されてはいるが、それに順応できない学生は取り残され、それでもテストでいい成績を残すために、深く考えるよりはとにかく暗記するということが起こる。多角的な目で観察し、深く考え、疑問を持つ学生なども変わり者として見られがちになる。つまりテストのための勉強であり、将来役に立つ能力の獲得のための学習ではなくなっている。

先に話した「日本語教育入門」の授業で学生たちの反応を見ると、高校までの教育がどのようなものであったのかを見せられているようにも感じた。教卓に近い方には留学生が座り、中央から後ろには日本人学生が座るという形が出来上がっていたが、今まで受けてきた教育や教育に対する態度の違いを表しているようにも感じた。もちろん日本人学生でも積極的に前方に座る者もいた。問題は受け身ではなく、主体的に授業に参加し、考え、彼らの頭の中で生きた知識として「学び」が起こせるかであった。56人の登録者の中で実際に日本語教育の世界に飛び込む学生が何人いるのだろうか。現実には3分の1にも満たないだろう。単に副専攻ということで登録したに過ぎない者もいるだろう。しかし彼らにも、将来的に出会うであろう問題に対処できるための知識や技能を、自ら学んで活用してほしいと願わずにはいられない。^[註]

(1) 野嶋栄一郎「コンピュータを利用した大学教育方法の改善」、菅井・赤堀・野嶋編著『情報教育論—教育工学へのアプローチ』放送大学教育振興会、2002年、148頁。